



倉田小だより 9月号

～つながり いきいき 倉田っ子～

横浜市立倉田小学校



本当に怖いものは・・・

校長 末松 隆一郎

暦の上では立秋を過ぎ処暑。ふと空を見上げれば、夏と秋とが交差する「行合(ゆきあい)の空」に出会う頃となりました。長い夏休みも終わり、学校に子ども達の元気な声が戻ってきました。行動制限等はなかったものの、感染第7波急拡大の中での今年の夏、様々な思いで過ごされたことと思います。引き続き感染対策徹底を図る中、前期後半、そして年度後半に向けて「再生と創造」を図っていきたいと思います。

夏の風物詩と言えば、海、花火、虫取り、スイカ、ラジオ体操・・・、挙げればきりがありませんが、その一つに、「怪談」「肝試し」があり、私も小学生の頃は、たしか日テレ系だったかと思いますが、夏休み恒例「あなたの知らない世界」を、びくびくしながら観ていた記憶があります。最近はその類の番組はあまりみかけませんでしたが、今年の夏は、地上波でいくつかの番組も放送され、夏の風物詩として「復権」の兆しをみせているとのこと。そして、私は、「お化け・妖怪・心霊」と聞いて、真っ先に思い浮かべる一人の少年がいます。それは、「ゲゲゲの鬼太郎」です。



「ゲゲゲの鬼太郎」は、水木しげる氏原作の漫画作品で、1960年代よりアニメ化され放送。以降6度に渡り約10年ごとに放送、また、実写映画化された作品です。最近では2018年～2020年に第6期が放送されるなど、誰もが知っている、そして、きっと幅広い世代の「鬼太郎ファン」がいることと思います。

私が子供の頃一番夢中になって観始めたのは、1971年の第2期、2回目のテレビアニメ化の時でした。とても楽しみでしたが、大変怖かったのを覚えています。その中で、今でも鮮明に覚えている作品があります。それは第18話の「幸福という名の怪物」という話です。話の概略は、人間の願いを叶える「地獄玉」というものがあり、「地獄玉」は人間の欲望が膨れ上がるとともに膨れ、やがて爆発してしまうというもの。これを手にしてしまった人間がどんどん欲を膨らませていきます。鬼太郎が爆発を防ぐために何とか説得しようとするのですが、その人は言うことを聞かず、結局最後に「地獄玉」は爆発して何もかも失ってしまうという話でした。



人間を守るために悪い妖怪をやっつけるというのが、「ゲゲゲの鬼太郎」の基本的な筋なのですが、この話には、悪い妖怪や恐ろしい幽霊はでてきません。なのに、今でも忘れられないのは、鬼太郎のお父さん、「目玉おやじ」のこんな台詞があったからだと思います。

「人間というのは、欲望のかたまりで、欲望にはかぎりがないんじゃ。鬼太郎、人間が欲にからむと、恐ろしいものじゃのう。」

きっと私は、どんな恐ろしい妖怪よりも、人間がもっている強欲と、そこから抜け出せない弱さ、その末路を、爆発した夕暮れの廃墟にたたずむ一家の表情とともに心に刻まれ、「欲張ってはいけない」という教訓とともに、覚えているのだと思います。1971年は、高度経済成長の歪みと陰りが見え始めたオイルショック前夜の時代。「本当に恐ろしいものは、人間の心の中にある。」そんなメッセージを、この作品は、鬼太郎でさえ止めることができなかったということを通して訴えていたのではないかと思います。

50年の時を越え、今この教えを思い出し、あらためて、我欲にのみ走ることなく、心清く気持ちよく生活していきたい、こんなことを思う、夏の終わりです。

今日から始まる前期後半、そして年度後半に向け、子ども達一人一人のために、さらに教育活動が充実していきますよう教職員一同鋭意努力を重ねていきたいと思ひます。よろしくお願ひ致します。